

海門寺新聞

第209号 08年創刊
2026年(令和8年)1月号

大和市柳橋1-20-7

TEL 046-263-8604

住職 橋本 覚 正

海門寺常例法座のご案内

日 時：2025(令和7)年1月10日(土曜日) 13:30～

お勤め：正信偈を読誦

お位牌：故人の過去帳、ご位牌のご持参をお勧めします

お迎え：13時【大和駅南口前の横断歩道を渡った場所】

この付近にいます

13時過ぎても迎えが来ない場合

海門寺までご連絡ください

お帰りの際も駅まで送迎いた

します



あけましておめでとうございます

本年もどうぞよろしく願います

新年あけましておめでとうございます。

旧年中は多くの方に当山へお参りいただき、温かいご縁を重ねることができました。心より御礼申し上げます。年が改まり、皆さまが健やかに、そして穏やかな心で日々を過ごされますよう、念じ申し上げます。

新年は、私たちにとって心を整え、歩みを見直す大切な機会です。境内に差し込む冬の光や、曉経の響きに耳を澄ませると、自ずと心の中に静けさが広がります。その静寂の中で、昨年の出来事を振り返り、感謝すべきこと、手放したいこと、新たに始めたいことが少しずつ浮かび上がってくるものです。

本年も、当山は皆さまを変わらずお迎えお待ち申し上げます。常例法座への参加はもちろん、法事のご相談、その他のご相談等どうぞお気軽にご連絡ください。お寺は特別な場所ではなく、誰にとっても開かれた“心の休息所”でありたいと願っております。

どうか今年一年が、皆さまにとって穏やかで実り多い時間となりますように。本年もよろしくお願い申し上げます。

雅 楽

雅楽（ががく）は、日本の宮廷文化を象徴する芸能として、千年以上にわたり受け継がれてきました。単なる古典音楽というより、国家儀礼・宗教・芸能が重層的に絡みあう総合芸術であり、現在も宮内庁式部職楽部や各地の寺社を中心に演奏が続けられています。

雅楽を特徴づけるのは、音色の豊かさと独特の間です。箏（ひちりき）の鋭い音、龍笛（りゅうてき）の流麗な旋律、笙（しょう）の和音が溶け合うと、どこか現実から離れた静謐な響きが立ちのぼる。舞楽が加わると、色鮮やかな装束や緩やかな所作が音と呼応し、視覚的な奥行きを与える。

現代の私たちにとって、雅楽はしばしば「遠い存在」に感じられるかもしれませんが、しかしその響きは意外にも心に馴染みやすく、音数の少ない旋律やゆったりとした拍は、忙しない日常を一度外に置き、心のリズムを整えてくれるものです。お正月の時期に神社に行くと雅楽の音が流れていたりします。

海門寺では年2回ほど住職の持音である笙を独奏いたします。今年一回目は一月の常例法座のときに吹きますので、ぜひお越しください。

数え年（かぞえとし）

新しい年を迎えると、「今年はどうな一年になるだろう」と心があらたまるものです。お寺ではこうした節目の季節に「数え年」の話題に触れることがあります。数え年とは、生まれたときを一歳とし、正月を迎えることに年齢が一つ加わるという、日本古来の年齢の数え方です。現代では誕生日ごとに歳を重ねる満年齢が一般的ですが、かつての人々にとっては、正月は誰もが一斉に年を重ねる特別な日でした。

数え年には、「命はすでに授かっている」という考え方が根底にあります。生まれた瞬間だけでなく、お腹の中にいるときからすでに尊い存在であるという命へのまなざしが表れているのです。また、正月に全員が歳を重ねるといふ習慣は、

「ともに生き、ともに歳を加える」共同体のつながりを深める役割も果たしていました。現代では生活様式が大きく変わり、数え年を意識する機会は少なくなりました。しかし、年の初めに自分の歩みを振り返り、「今年も無事に歳を重ねさせていただいた」と感謝を向ける心は、いつの時代も変わらず大切にしたいものです。

年回忌表（二〇二六年 令和八年）

一周忌	二〇二五年（令和七年）
三回忌	二〇二四年（令和六年）
七回忌	二〇二〇年（令和二年）
十三回忌	二〇一四年（平成二十六年）
十七回忌	二〇一〇年（平成二十二年）
二十三回忌	二〇〇四年（平成十六年）
二十五回忌	二〇〇二年（平成十四年）
二十七回忌	二〇〇〇年（平成十二年）
三十三回忌	一九九四年（平成六年）
三十七回忌	一九九〇年（平成二年）
四十三回忌	一九八四年（昭和五十九年）
四十七回忌	一九八〇年（昭和五十五年）
五十回忌	一九七七年（昭和五十二年）

海門寺新聞

第210号 08年創刊
2026年(令和8年)2月号

大和市柳橋1-20-7

TEL 046-263-8604

住職 橋本 覚 正

海門寺常例法座のご案内

日 時：2026(令和8)年2月14日(土曜日) 13:30～

お勤め：正信偈を読誦

お位牌：故人の過去帳、ご位牌のご持参をお勧めします

お迎え：13時【大和駅南口前の横断歩道を渡った場所】

この付近にいます

13時過ぎても迎えが来ない場合

海門寺までご連絡ください

お帰りの際も駅まで送迎いた

します



涅槃会

涅槃会（ねはんえ）は、釈尊が入滅した日を偲ぶ仏教行事で、毎年二月十五日前後に多くの寺院で営まれます。釈尊は八十歳で沙羅双樹の下に横たわり、静かに涅槃へ入ったとされ、その場面は「涅槃図」として今も各地に伝えられています。

涅槃図には、弟子や信徒だけでなく、天人、動物、鬼神、龍までもが嘆き悲しむ姿が描かれています。これは釈尊の教えが人間界にとどまらず、あらゆる生命に及ぶものであったことを象徴している。とりわけ泣き伏す動物の姿は、見る者に無常と慈悲を直感的に伝える力をもちます。

現代において涅槃会は、死を遠ざけがちな私たちに「終わりを見つめることは、よりよく生きることにつながる」という視点を与えてくれる行事だ。釈迦の最期を思い起こすことで、今この瞬間をどう生きるかを問い直す。涅槃会は過去の出来事を悼む儀式であると同時に、現在と未来を照らす静かな灯なのであります。

涅槃図



厄年

厄年は、人生の節目にあたる年齢を不安定な時期と捉え、災いを慎もうとする日本独自の民間信仰であります。男性なら四十二歳、女性なら三十三歳が大厄として知られ、神社での厄払いが一般的です。しかし仏教、とりわけ浄土真宗はこの厄年観と少し距離を置いた立場を取ってきました。浄土真宗では、災いの原因を特定の年齢に求める考え方よりも、「人は誰しも不完全で、思い通りにならない存在である」という人間観を重視します。阿弥陀仏の本願は善悪や運不運に左右される私たちを、そのまま救うはたらきであり、厄年だから不幸になる、折れば厄が消える、という発想とは基本的に異なります。そのため、浄土真宗の寺院では、原則として厄除け祈禱は行いません。

しかし現実の生活では、厄年とされる年齢が体力や環境の変化と重なりやすいのも事実であります。浄土真宗はこれを「迷信だから切り捨てる」のではなく、「自分の有限さを知り、生活を見直す縁」として受け止めることです。厄年をどう受け止めるか。その問いに対し、浄土真宗は「厄を避ける」のではなく、「厄を感じる心とともに生きる」道を静かに示しているのです。

「からし種の話」

釈尊のもとに、わが子を亡くした母親がやって来たという話があります。悲しみに打ちひしがれた彼女は、「この子を生き返らせてください」と釈尊に言いました。釈尊はすぐに否定も慰めもせず、「死人を出したこのない家から、からし種をもらってきなさい」と静かに告げました。

母親は村中を回りました。しかし、どの家にも必ず死別の経験があったのです。やがて彼女は気づきます。自分だけが不幸なのではない。生きるということは、必ず別れを抱えているのだと。そのとき釈尊は、無常という現実を押しつけるのではなく、悲しみを生きる道を共に示した。

この逸話は、浄土真宗の眼差しと深く重なります。浄土真宗は、「正しく悟れ」「迷いを断て」とは言いません。悲しみや弱さを抱えたままの私を、そのまま救うという阿弥陀仏の本願を聞く教えであります。釈尊がしたのは、苦しむ人を突き放すことでも、奇跡で問題を消すことでもなかった。現実を生き抜く目を、そっと開かせたのであります。

釈尊の逸話は、立派な人の物語ではありません。どうにもならない私たちのところまで降りてきて、共に立ち止まってくれる仏の話なのであります。

お餅のライフハック

正月が過ぎると、戸棚の奥に手つかずのまま残るお餅の存在が気になり始めます。雑煮や磯辺焼きはもう十分、けれど捨てるのは惜しい。そんなときこそ、ちょっとしたライフハックが役に立ちます。

まず覚えておきたいのが、焼き餅が網やアルミホイルにくっつかない方法です。焼く前にお餅に醤油を数滴たらすだけ。表面に膜ができ、驚くほどスツと離れます。後片付けが楽になるだけでなく、香ばしさも増し一石二鳥です。

もう一つおすすめなのが、電子レンジで「つきたて風」に戻す方法。耐熱容器にお餅を入れ全体が浸るくらいの水を加える。ラップはせず、五〇〇ワットで約二分加熱するだけ。まだ硬ければ十秒ずつ追加する。これだけで、表面はなめらか中はふんわりとした食感に戻ります。焼く前の下準備としても使える便利技です。

また、やわらかく戻した餅を細かく刻み、少量ずつバナナアイスに混ぜ込むだけで、スポンジに絡みつく独特の伸びが出る。餅のデンプン質が粘りを生み、「なかなか落ちない」感覚を再現してくれるのです。特別な材料は不要、余った餅と市販アイスで楽しめる、

産バふらうらびド、フノノジでト。

海門寺新聞

第211号 08年創刊
2026年(令和8年)3月号

大和市柳橋1-20-7

TEL 046-263-8604

住職 橋本 覚 正

海門寺常例法座のご案内

日 時：2026(令和8)年3月14日(土曜日) 13:30～

お勤め：正信偈を読誦

お位牌：故人の過去帳、ご位牌のご持参をお勧めします

お迎え：13時【大和駅南口前の横断歩道を渡った場所】

この付近にいます

13時過ぎても迎えが来ない場合

海門寺までご連絡ください

お帰りの際も駅まで送迎いた

します



春季彼岸会

春の彼岸を迎えると、寒さの中にあつた命が静かに動き出し、やわらかな光が私たちを包み込みます。彼岸とは、迷いの世界である此岸から、阿弥陀仏の浄土という彼岸を想うご縁です。浄土真宗では、彼岸に修行を重ねて悟りを得るというよりも、すでに阿弥陀仏の本願に抱かれている私のうちに気づかせていただく時と味わいます。

私たちは日々の忙しさの中で、自分の力で生きているかのように思いがちです。しかし、思い通りにならない現実や、避けることのできない老・病・死に出会うとき、自らのほからの限界を知らされます。その私をそのまま救おうと願われたのが、阿弥陀仏の「南無阿弥陀仏」のおはたらきです。

彼岸にお念仏申すことは、亡き人を通して、仏さまの願いに照らされて生きる私自身を見つめ直すことでもあります。今ここに生かされている尊さに頷き、いただいたいのちを大切に歩ませていただく。その一歩一歩が、すでに浄土へとつながる道であることを、春の彼岸は静かに教えてくれます。

法 名

法名と戒名

「ご葬儀の際によく耳にする「戒名」と「法名」。同じように思われがちですが、その意味合いには大切な違いがあります。戒名とは、本来仏教の戒律を受けて仏弟子となった証として授かる名です。修行を重ね、戒を守る者としての歩みをあらわしています。一方、浄土真宗で用いるのは「法名」です。これは戒を守り得た証としていただく名ではありません。阿弥陀仏の本願を聞き、そのお救いに出会わせていただいた仏弟子としての名です。

浄土真宗では、自らの修行や努力によって悟りに至るのではなく、煩惱をかかえたままのこの私を必ず救うと誓われた、阿弥陀仏のはたらきにまかせる道をいただきます。ですから法名は、何かを成し遂げた結果として授かるものではなく、如来の願いに遇った身であることをあらわす名なのです。

そこには優劣や功績の差はありません。ただ、南無阿弥陀仏と呼びかけられている私の姿があるだけです。法名と戒名の違いを通して、仏さまのお救いのいただき方の違いにも、心を向けてみたいものです。

釋○○○ 釋尼○○○ 信士 信女

「釋（しゃく）」とは、お釈迦さまの「釋迦」の「釋」であり、「釋尊の弟子」という意味をあらわします。浄土真宗では、法名の上にこの「釋」をいただきます。以前は男性は「釋○○○」、女性は「釋尼○○○」と記しました。「尼」は本来、女性の仏弟子を示す言葉です。いずれも、阿弥陀仏の本願に帰依し仏弟子として歩む身であることを表しています。ただし、現在は「尼」の字は使わず、男女とも「釋○○○」とされます。（海門寺では、先祖代々尼が付いている等の理由で希望される場合、尼を入れることも可能です。）

一方、「信士」「信女」は、主に他宗で用いられる称号で、「仏法を信じる男性・女性」という意味があります。これは在家の信者としての立場を示すもので、戒名の位号の一つです。ただし、浄土真宗では、位の上下や功績の違いを強調する考え方はとりません。ただ、煩惱を抱えたままの私、如来の願いに抱かれている仏弟子であるという一点を大切にします。「信士」「信女」につきましても、先祖代々付いてる等ご希望の場合、つけることが可能です。

法名をいただくには

浄土真宗では、本来、法名は生前に帰敬式（ききようしき）を受けていただくものです。帰敬式とは、仏・法・僧の三宝に帰依し、阿弥陀仏の本願をよりどころとして生きる身となることをあらわす大切な儀式です。

しかし生前は何かと忙しく帰敬式を受けていない場合は葬儀の折に法名をいただいたり、また、葬儀後に住職に依頼していただく場合もあります。そのときは、亡き方が阿弥陀さまのお救いの中にある身として仏弟子の名をお授けいただくのです。浄土真宗では、人は亡くなって仏になるのではなく、阿弥陀仏のはたらきによって浄土に生まれ、仏とならせていただくのです。法名は、そのお救いの中にあることをあらわす名でもあります。生前にいただくにせよ、ご葬儀の折にいただくにせよ、法名は「仏さまに遇っている私」を示す名です。その響きを通して、今を生きる私自身の歩みもまた、静かに問いかけられているのです。現してくれるのです。

海門寺新聞

第212号 08年創刊
2026年(令和8年)4月号

大和市柳橋1-20-7

TEL 046-263-8604

住職 橋本 覚正

海門寺花まつりのご案内

※第1土曜日です。ご注意ください。

日時：2026(令和8)年4月4日(土曜日)13:30～

お勤め：正信偈を読誦

お位牌：故人の過去帳、ご位牌のご持参をお勧めします

お迎え：13時【大和駅南口前の横断歩道を渡った場所】

この付近にいます

13時過ぎても迎えが来ない場合、海門寺までご連絡ください。お迎えします。



花まつり(灌仏会)

四月八日は、お釈迦さまのご誕生をお祝いする「花まつり(灌仏会)」の日です。色とりどりの花で飾られた花御堂の中に誕生仏を安置し、甘茶をかけてお祝いする行事として、多くの寺院で親しまれています。これは、お釈迦さまが誕生された際、天から甘露の雨が降り注いだという伝承にちなむものです。

浄土真宗においても、この日は仏教を説かれたお釈迦さまのご誕生をよるこび、感謝する大切な機会とされています。もっとも、甘茶をかけること自体に功德やご利益があると考えられるのではなく、仏法に出逢わせていただいたご縁をよるこび行事として受け止めます。お釈迦さまがこの世にお生まれくださったからこそ、阿弥陀仏の本願の教えが伝えられ、私たちは念仏の教えに出あうことができました。

花まつりは、単にお釈迦さまの誕生を祝う日というだけでなく、仏法との出会いをあらためて喜び、いのちの尊さを見つめ直すご縁の日でもあります。色とりどりの花に囲まれた誕生仏に甘茶をそそぎながら、私たちもまた仏さまの教えに生かされている身であることを、静かに味わいたいものです。

甘茶

花まつり（灌仏会）では、誕生仏に甘茶をかけてお釈迦さまのご誕生をお祝いします。このとき用いられる甘茶は、「アマチャ」という植物の葉を乾燥させ、発酵させて作られるお茶で、自然のやさしい甘みがあるのが特徴です。砂糖を加えているわけはありませんが、独特の甘さがあり、古くから花まつりの行事に用いられてきました。

誕生仏に甘茶をそそぐのは、お釈迦さまがお生まれになったとき、天から甘露の雨が降り注いだという伝えにちなむものです。花御堂に安置された誕生仏に甘茶をかける姿は、春の仏教行事として多くの人に親しまれています。

浄土真宗においては、この行い自体に特別な功德やご利益があると考えるのではなく、お釈迦さまのご誕生をよろこび、仏法とのご縁をあらためて味わう機会として大切にします。お釈迦さまがこの世にお生まれくださったからこそ、仏の教えが私たちに伝えられ、今日まで受け継がれてきました。

海門寺でも、4月

4日に誕生仏に甘茶をご用意して皆さまをお待ちしておりますので、どうぞお気軽にお越しください



誕生仏

釈尊が誕生直後に「天上天下唯我独尊」と唱えた姿

台湾に行ってきました

浄土真宗本願寺派スカウト指導者会の行事として、3月5日から7日までの2泊3日で台湾への海外交流研修に参加しました。これは、私が担当している築地本願寺東京教区教務所の業務の一つでもあり、台湾の僧侶やボーイスカウト指導者の方々との交流を目的とした研修です。

現地では「恵中寺」というお寺を訪れ、僧侶の方々やボーイスカウトの指導者の皆さんと交流の機会をいただきました。言葉や文化の違いはあるものの、仏教や青少年育成に対する思いには共通するものが多く、とても温かい時間となりました。

台湾は「100メートル歩けばコンビニがある」と言われるほどのコンビニ大国だそうです。実際に街を歩いていると、本当にすぐ目に入るほど多く、特に多いのがセブンイレブン、次いでファミリーマートとのことでした。また、バスで移動していると見慣れた日本のチェーン店の看板が目に入ります。吉野家、くら寿司、モスバーガー、サイゼリヤ、コメダ珈琲など、日本でもおなじみのお店が台湾にも数多くあり、日本との距離の近さを感じました。食べ物は何れもととても美味しかったので

すが、不思議なことに「見た目と味が微妙に違う」ものが多く、口に入れるたびに少し不思議な感覚になりました。同じような料理に見えても、香辛料や味付けの違いによって、台湾らしい個性が感じられたのだと思います。

今回の研修では、台湾にある本願寺の開教地も訪れることができました。現地の門信徒の方々とも交流し、別院の記録帳にも記帳させていただき、「海門寺」の名前を台湾の地に残していただくことができました。

国や言葉が違ってても、浄土真宗の教えは変わりません。現地の方々と一緒に「讃仏偈」のお勤めをしたとき、そのことを強く実感しました。同じお念仏の教えのもとに集うご縁のありがたさを、改めて感じた時間

短い研修ではありましたが、文化の違いを感じながらも、仏縁によってつながる温かさを実感できた、とても貴重な経験となりました。



海門寺新聞

第213号 08年創刊
2026年(令和8年)5月号

大和市柳橋1-20-7

TEL 046-263-8604

住職 橋本 覚 正

海門寺永代経法要及び降誕会のご案内

日 時：2026(令和8)年5月9日(土曜日) 13:30～

お勤め：正信偈を読誦

お位牌：故人の過去帳、ご位牌のご持参をお勧めします

お迎え：13時【大和駅南口前の横断歩道を渡った場所】

この付近にいます

13時過ぎても迎えが来ない場合

海門寺までご連絡ください

お帰りの際も駅まで送迎いた

します



訂正とお詫び

先般送付いたしました海門寺年間行事表におきまして、五月開催予定の海門寺永代経法要ならびに親鸞聖人降誕会のご案内につきまして、期日に誤りがございました。

皆さまにはご迷惑をおかけいたしましたことを、深くお詫び申し上げますとともに左記のとおり訂正させていただきます。

【誤】五月十六日(土)

【正】五月九日(土)

なお、海門寺永代経法要ならびに親鸞聖人降誕会は、五月九日(土)午後一時三十分より厳修いたします。

お間違いないよう、ご確認くださいますようお願い申し上げます。

この度は不手際によりご迷惑をおかけいたしましたことを、重ねてお詫び申し上げますとともに、皆様のご参詣を心よりお待ちしております。

海門寺永代経法要及び親鸞聖人降誕会

このたび五月九日（土）に厳修いたします海門寺永代経法要ならびに親鸞聖人降誕会の法話ご講師には、昨年十一月の海門寺報恩講法要にてご法話をいただきました、北海道紋鼈寺の奥田章吾先生をお迎えし、ご法話を賜ります。再びご縁をいただきありがたいご法縁となることと存じます。

また、当日の法要では正信偈（行讃）をお勤めいたします。普段お勤めしております正信偈（草譜）とは異なる節（音程）となりますが、どなたでもご一緒にお勤めいただけます。どうぞお聞きいただきながら、心静かにお勤めください。

皆様お誘いあわせのうえ、ご参詣くださいますようお願い申し上げます。



奥田 章吾 師

北海道伊達市紋鼈寺衆徒

本願寺派布教使

降誕会

五月二十一日は宗祖親鸞聖人のご誕生をお祝いする「降誕会」の日です。親鸞聖人は承安三年（一一七三年）、京都日野の里にお生まれになりました。貴族の家に生まれながらも、九歳で比叡山に入り、厳しい修行の道を歩きました。しかし、どれほど修行を重ねても自らの迷いは尽きず、苦悩の中で法然上人と出遇われ、念仏の教えに導かれていかれました。

その後、流罪や非僧非俗の生活など、多くの困難を経験されながらも、すべての人が阿弥陀さまの本願によって救われていく道をお示しくされました。「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」というお言葉は、自らの力に頼るのではなく、阿弥陀さまのはたらきに身を任せて生きていくことの大切さを伝えてくださっています。

降誕会は、親鸞聖人のご誕生をお祝いするとともに、そのご生涯とお念仏のみ教えにあられたために出遇う大切なご縁です。日々の忙しさの中で忘れがちな、いのちの尊さや生かされていることのありがたさに思いをいたし、親鸞聖人のみ教えに耳を傾けるひとときといたしましょう。この尊いご縁に、どうぞお誘いあわせのうえご参詣ください。

引っ越し（住職自宅）

現在、私は築地本願寺に勤めながら、海門寺の住職としても従事させていただいております。築地本願寺の晨朝勤行に出仕する関係で、これまでは築地本願寺の徒歩十分ほどの場所に賃貸を借りて暮らしておりました。

しかし、近年の社会情勢の影響もあってか、住んでいた物件の家賃が値上げとなりました。その上げ幅は実に三割。さすがにこの値上げは現実的ではないと感じ、引っ越しを決断することにしました。

新しい住まいを探すにあたり、候補は二つありました。一つはこれまでと同じく徒歩圏内の物件、もう一つは三駅離れた場所の物件です。通勤の利便性を考えれば徒歩圏内が魅力的でしたが、最終的に決め手となったのは、三駅離れた物件が二〇二六年三月にリノベーションされたばかりだったことでした。間取りや内装も新しく、これからの生活を心地よく整えられると感じたのです。

これまでよりも少しだけ通勤時間は延びましたが、その分、暮らしの環境は整いました。日々の生活が整うことで、心にもゆとりが生まれます。場所が変わることは不便を伴うものですが、同時に新しい気づきや出会いをもたらしてくれるものもあります。

住まいが変わり、通う道が変わり、日々の風景も少しずつ変わりました。しかし、どこに住んでも、変わらないのはご縁を大切にしながら日々を勤めて

海門寺新聞

第214号 08年創刊
2026年(令和8年)6月号

大和市柳橋1-20-7

TEL 046-263-8604

住職 橋本 寛正

海門寺永代経法要及び降誕会のご案内

日 時：2026(令和8)年 **6月13日**(土曜日) 13:30～

お勤め：正信偈を読誦

お位牌：故人の過去帳、ご位牌のご持参をお勧めします

お迎え：13時【大和駅南口前の横断歩道を渡った場所】

この付近にいます

13時過ぎても迎えが来ない場合

海門寺までご連絡ください

お帰りの際も駅まで送迎いた

します



お盆を迎えて

お盆の季節を迎えます。海門寺では、本堂でのお盆法要ならびに、ご自宅へお伺いしてのお参りを承っております。

七月盆・八月盆のいずれにも対応しておりますので、ご希望の日時などございましたら、お気軽にご相談ください。

なお、お盆期間中は法事やお参りが重なる場合も多くございます。日時によってはご希望に添えないこともありますので、お早めにご連絡いただけますと幸いです。

ご先祖さまをご縁として、あらためてお念仏のみ教えに遇う大切なひとときとなりますよう、お参りさせていただきます。

また、海門寺では七月、八月の常例法座にて、お盆の法要(盂蘭盆会)をお勤めします。

七月十一日(土)の盂蘭盆会には、浄土真宗本願寺派布教使の加藤蓮先生をお迎えし、ご法話をいただきます。

どうぞご家族、ご友人お誘いあわせのうえ、ご参拝ください。

海門寺永代経法要

5月9日(土)に海門寺永代経法要をお勤めさせていただきました。

永代経法要は、先祖代々受け継がれてきた浄土真宗のみ教えを、これから先の世代へと永く伝えていく大切なご法要であります。ご門徒の皆さまとともに阿弥陀さまのみ教えに遇わせていただき、尊いご縁をいただくひとときとなりました。

これからも、先人方より受け継いできた海門寺のご縁を大切にしながら、浄土真宗のみ教えを次の世代へと伝えてまいりたいと思います。

法要中にお読みさせていただきました。

釋 円 庸	釋 行 法	釋 願 海	釋尼 穩 彌
釋尼 秀 妙	釋 學 淨	釋 斉 心	釋 司 耀
釋 光 明	釋 恒 誠	釋 昭 誠	慈照院釋敬俊

※広報を希望しないにチェックを入られた方は含まれておりません。

※広報を希望しないにチェックを入れていない方で、お名前がない場合大変お手数をおかけしますが、海門寺までご連絡ください。

引っ越し

家賃が三割ほど上がるとの連絡を受け、このたび長年暮らした築地本願寺周辺の住まいを離れ、引っ越しをいたしました。

荷造りを進める中で、普段は意識することのない「身体のありがたさ」に改めて気づかされました。重い段ボールを運び、何度も立ったり座ったりを繰り返すうちに腰へ負担がかかり、左足を上げるだけでも痛みを感じるようになってしまったのです。やがて足を思うように上げられなくなり、不安を覚えました。が、整体院へ通い、一週間ほど治療を続けたおかげで、現在は痛みも落ち着き普段通りに過ごせています。

十代、二十代の頃と同じ感覚で身体を動かしてはならない、そんな現実を、自らの身体を通して教えられた思いがいたします。浄土真宗では、人は決して自分一人の力だけで生きているのではないと教えられます。身体もまた、自分の思い通りになるものではなく、多くのご縁によって支えられています。痛みを感じたとき、「まだ頑張りが足りない」と自分を責めるのではなく、「少し休みなさい」という身体からの声として受け止めることも大切なのではないのでしょうか。

引っ越しは新しい暮らしへの第一歩です。しかし、急ぎすぎて身体を壊してしまつては元も子ありません。無理をせず、人の手を借りながら歩んでいく。その姿勢もまた他者とのつながりの中で生かされている私たちの在り方なのだと思います。

【案内】 別紙に鎌倉組仏教壮年会連盟 講演会（落語）の案内を同封しております。住職は行けませんが、参加希望の方は海門寺までご連絡ください。

海門寺新聞

第215号 08年創刊
2026年(令和8年)7月号

大和市柳橋1-20-7

TEL 046-263-8604

住職 橋本 覚 正

海門寺盂蘭盆会のご案内

日 時：2026(令和8)年 **7月11日**(土曜日) 13:30～

お勤め：正信偈を読誦

お位牌：故人の過去帳、ご位牌のご持参をお勧めします

お迎え：13時【大和駅南口前の横断歩道を渡った場所】

この付近にいます

13時過ぎても迎えが来ない場合

海門寺までご連絡ください

お帰りの際も駅まで送迎いた

します



盂蘭盆会七月、八月？

お盆の時期になると「なぜ七月にお盆をする地域と、八月にお盆をする地域があるのですか」と尋ねられることがあります。

もともとお盆は旧暦の七月十五日を中心
に営まれていました。しかし明治時代に新
暦が採用されると、旧暦七月十五日は新暦
ではおおむね八月中旬にあたるため、地域
によって対応が分かれました。新暦の七
月十五日前後にお盆を勤めるようになった
地域が「七月盆」、旧暦の日付に近い八月
中旬に勤める地域が「八月盆」です。東京
をはじめとする都市部では七月盆が多く、
全国的には八月盆が主流となっています。

浄土真宗では、七月か八月かという違い
そのものに特別な意味を見いだすことはあ
りません。大切なのは、お盆をご縁として
仏さまのお教えに遇わせていただくことで
す。亡き方を偲び、お仏壇の前で手を合わ
せるとき、私たちは多くのご縁に支えられ
て生きていることに気づかされます。時期
は地域によって異なっても、お盆が私たち
に届けている願いは同じです。亡き方をこ
縁として仏法を聞き、お念仏申す生活を見
つめ直す。その尊い機会として、今年のお
盆を迎えたいものです。

海門寺孟蘭盆会(七月)ご講師

このたび七月十一日(土)に厳修いたします海門寺孟蘭盆会(七月)のご法話には、本願寺派布教使、神奈川県浄照寺の加藤蓮先生をお迎えし、ご法話を賜ります。

また、築地本願寺常例法座二〇二六年度六月・七月号のパンフレットでは、加藤先生が表紙を飾っておられます。奇しくも、その前号となる四月・五月号では海門寺住職が表紙を務めさせていただきました。このようなご縁も感じながら、皆さまとともに聴聞のひとときをいただければ幸いに存じます。

どうぞご家族、ご友人お誘いあわせのうえ、ご参詣くださいますようお願い申し上げます。



人生は様々な初めてを経験するためにある

「人生は様々な初めてを経験するためにある」この言葉は、私が考えた言葉で座右の銘にしている言葉です。

人生を振り返ると、私たちは数え切れないほどの「初めて」を経験してきました。初め

て歩いた日、初めて学校へ行った日、初めて仕事をした日。大人になってからも、新しい出会いや環境の変化など、初めての出来事は続いていきます。

しかし、年齢を重ねるにつれて、私たちは知らず知らずのうちに「慣れたこと」や「い

つもどおり」を好むようになります。失敗したくない、不安な思いをしたくないという気持ちから、新しい一歩をためらうこともあるでしょう。

けれども考えてみれば、初めての経験があったからこそ、私たちは成長し、人生を豊

かなものにしてきました。振り返れば、不安だった出来事も、今では大切な思い出や学びとなっていることが少なくありません。

浄土真宗では、人生は自分の思い、か
て導
ださ

れていくものといえます。思い
る大切なご縁です。

これから先も、嬉しい初めてや戸惑う初めてが待っていることでしょう。その一つひとつを人生の贈り物として受け止めながら、今日という新しい一日を歩ませていただきたいものです。お念仏の中で、ご縁に支えられて生きる身であることを味わいながら。たしませよう。この尊いご縁に、どうぞお参詣くださることを心から願っています。



人生初夜行バスに乗って名古屋に行き、人生初のサモエドカフェ(犬カフェ)に行ってきました。

海門寺新聞

第216号 08年創刊
2026年(令和8年)8月号

大和市柳橋1-20-7

TEL 046-263-8604

住職 橋本 覚 正

海門寺盂蘭盆会のご案内

日 時：2026(令和8)年 **8月8日**(土曜日) 13:30～

お勤め：正信偈を読誦

お位牌：故人の過去帳、ご位牌のご持参をお勧めします

お迎え：13時【大和駅南口前の横断歩道を渡った場所】

この付近にいます

13時過ぎても迎えが来ない場合

海門寺までご連絡ください

お帰りの際も駅まで送迎いた

します



盂蘭盆会 提灯

お盆が近づくと、玄関先やお仏壇の前に提灯を飾るご家庭も多いことでしょう。一般には、故人の霊が迷わず帰って来られるよう灯りをともすものとされています。

浄土真宗では、亡くなられた方は阿弥陀さまのお救いによって、ただちにお浄土へ往生されるといただきます。そのため、お盆に霊をお迎えするという考え方はなく、提灯を飾ることも本来の習わしではありません。

だからといって、「提灯を置いてはいけない」ということはありません。地域の風習や、ご先祖を偲ぶ家族の思いを大切にしながら、その意味を正しく受け止めることが大切です。提灯の灯りに手を合わせるときは、故人を偲ぶとともに、そのご縁を通して阿弥陀さまのお慈悲にあわせていただく機縁として、盂蘭盆会をお迎えしたいものです。



暑さの中で思い出す 「無常」

梅雨が明け、本格的な夏を迎える頃になると、強い日差しや照り返しに「今年も暑い夏がやってきた」と感じます。朝から響く蟬の声、入道雲が広がる青空、夕立のあとに漂う土の香り――。毎年繰り返される夏の風景ですが、一日として同じ日はありません。天気も気温も、吹く風も、その日の私たちの心さえも、昨日と同じではないのです。

仏教では、このような「すべてのものは移り変わっていく」という真理を「諸行無常（しょぎょうむじょう）」と説いています。「無常」という言葉を聞くと、どこか寂しさや悲しさを思い浮かべる方もおられるかもしれません。しかし、本来の無常とは、ただ「ものごとは常に変化し続けている」という事実を表した言葉です。

夏の花である朝顔は、美しい花を咲かせても翌日にはしぼみます。青々と茂っていた木々も、やがて秋になれば色づき、葉を落とします。私たちの体も心も、年齢も環境も、刻一刻と変化しています。暑さがいつまでも続くように感じて、やがて秋風が吹き、季節は次へと移っていきます。

だからこそ、仏教では「今」を大切にすることが勧められます。「いつか時間ができたら」「そのうち会いに行こう」と思っているうちに、時は静かに流れていきます。後になって「あの時、もっと話をしておけばよかった」「感謝を伝えておけばよかった」と振り返ることも少なくありません。

親鸞聖人は、人の命もまた思い通りにはならず、限りあるものであることを深く見つめられました。だからこそ、自分の力だけを頼りに生きるのではなく、阿弥陀如来の限りない慈悲に照らされながら、一日一日をいただいて生きることの大切さをお示しくださいました。

暑い夏は、つい「早く涼しくならないかな」と先のことばかり考えてしまいます。しかし、蟬の声を耳にし、夕焼けを眺め、季節の移ろいを感じるひとときは、二度と戻ることのない、この瞬間だけのご縁です。その一瞬一瞬が、多くのいのちやご縁によって支えられ、与えられていることに気づかされます。

「無常」とは、決して私たちを悲しませる教えではありません。変わり続ける世界だからこそ、一日一日がかけがえのないものとなり、今ここに出会っている人との時間が尊いものとなります。そして、その尊さに気づかせてくださるのが仏さまのお慈悲です。

厳しい暑さが続く季節です。どうぞ熱中症などには十分お気をつけいただきながら、夏の景色の中に「無常」の教えを感じ、今日という一日を大切に味わっていただければと思います。



海門寺新聞

第217号 08年創刊
2026年(令和8年)9月号

大和市柳橋1-20-7

TEL 046-263-8604

住職 橋本 覚 正

海門寺彼岸会のご案内

日 時：2026(令和8)年 **9月12日**(土曜日) 13:30～

お勤め：正信偈を読誦

お位牌：故人の過去帳、ご位牌のご持参をお勧めします

お迎え：13時【大和駅南口前の横断歩道を渡った場所】

この付近にいます

13時過ぎても迎えが来ない場合

海門寺までご連絡ください

お帰りの際も駅まで送迎いた

します



お彼岸

暑さも和らぎ、秋風に季節の移ろいを感じる頃、お彼岸を迎えます。この時期になると、お墓参りをしたり、仏壇に手を合わせたりする方も多いことでしょう。亡き方を偲び、家族が集うひとときは、私たちにとって大切な時間です。

浄土真宗では、お彼岸を「亡き方のために功德を積む日」とは考えません。阿弥陀さまのお救いによって、お浄土へ往生された方々は、すでに仏となられています。だからこそ、私たちは亡き方を案じるのではなく、その方をご縁として仏さまのお慈悲に耳を傾けるのです。

「お墓参りに行かなければ」と思っていた心が、墓前で手を合わせた瞬間、「今の私はどう生きているだろう」「多くのいのちに支えられて今日がある」と、自分自身へと向き直る時間へと変わります。それは亡き方からの無言のはたらきかけともいえるでしょう。

お彼岸は、ご先祖さまに思いを寄せるとともに、阿弥陀さまの願いを聞き、自らの生き方を見つめ直す大切なご縁です。この秋もどうぞお寺へお参りいただき、仏法に耳を傾けるひとときをお過ごしください。

お彼岸に味わう 「生かされている」

朝夕の風に秋の気配を感じる頃、お彼岸を迎えます。暑さが和らぎ、虫の音が聞こえ始めるこの季節は、自然と足を止め、季節の移ろいに心を向ける時期でもあります。お寺やお墓へお参りされる方も多いことでしょう。

お彼岸は、ご先祖さまを偲ぶ日として親しまれています。しかし浄土真宗では、それだけではありません。亡き方をご縁として仏法に遇い、自らの生き方を見つめ直す大切なご縁といただいています。

私たちは普段、「自分の力で生きている」と思いがちです。しかし、今日という一日は、自分一人では決して成り立ちません。家族や友人、食べ物を育てる人、働く人、そして数え切れないのちの支えがあって、今ここに生かされています。

親鸞聖人は、そのような私たちを「阿弥陀如来の本願に支えられて生きる存在」と教えてくださいました。自らの力だけで人生を歩むのではなく、限りないお慈悲に包まれながら「生かされている」。そのことに気づくとき、「当たり前」だと思っていた毎日が、かけがえのない一日へと変わっていきます。

お墓の前で手を合わせるとき、「亡き方へ何かを届ける」というよりも、「今日まで生かされてきた私」を見つめる時間となります。命は私一人で続いてきたものではなく、多くのご縁によって受け継がれてきたものだったと気づかされます。

「生かされている」とは、決して自分を小さく見ることはありません。自分一人では生きられない事実を知り、多くのご縁と阿弥陀さまのお慈悲の中に今日の私があることを喜ぶ教えです。その気づきが、「当たり前」という言葉となり、日々の暮らしを豊かにしてくれるのです。

お彼岸は、亡き方を偲ぶとともに、自らが「生かされている」ことを味わう大切な節目です。秋の穏やかなひととき、お寺で仏さまのお話に耳を傾けながら、日々のご縁に感謝する時間を過ごしてみませんか。



海門寺新聞

第218号 08年創刊
2026年(令和8年)10月号

大和市柳橋1-20-7

TEL 046-263-8604

住職 橋本 覚 正

海門寺常例法座のご案内

日 時：2026(令和8)年10月10日(土曜日) 13:30～

お勤め：正信偈を読誦

お位牌：故人の過去帳、ご位牌のご持参をお勧めします

お迎え：13時【大和駅南口前の横断歩道を渡った場所】

この付近にいます

13時過ぎても迎えが来ない場合

海門寺までご連絡ください

お帰りの際も駅まで送迎いた

します



お知らせ

十一月の常例法座はいつもの第二土曜日ではなく、

十一月七日(土)

の第一土曜日になります。

十一月の常例法座は報恩講法要として、親鸞聖人のご耐徳を忍び仏徳讃嘆いたします。

また、法話のご講師には山本顯生師(浄土真宗本願寺派布教使、和歌山教区浄永寺衆徒、ビハラー僧)にビハラーについてお話いただきます。

「ビハラー」とは、仏教の教えを大切にしながら、病院や福祉施設などで、病氣や老い、死に向き合う方々とともに歩む活動です。単に医療や介護を行うだけでなく、その人の不安や苦しみに関心を持ち、一人の人間として尊重しながら支えていくことを大切にしています。浄土真宗では、阿弥陀さまの慈悲に包まれて生きるという視点から、苦しみの中にある方とともに歩み、その人生に寄り添うことを大切にされています。

法要のとき、 犬や猫は どうする？



ご自宅での法要の際、「犬や猫は別の部屋に移したほうがいいですか？」と聞かれることがあります。

でも、私としては「**そのままで大丈夫ですよ**」と思っています。何を隠そう、私は犬も猫も大好きです。七月の寺報でも書かせていただきましたが、夜行バスに乗って名古屋まで行きサモエド（大型犬）カフェに行くほどです。

もちろん、法要中に元気いっぱい走り回ったり、ずっと鳴いていたりすると、ちょっと困ってしまうこともあります。そんなときは、少し離れたところで待っていてもらいましょう。でも、静かに隣に座っていたり、こちらをじっと見ていたりするくらいなら、わざわざ別の部屋に移さなくても大丈夫です。

犬や猫も、その家で一緒に暮らしてきた大切な家族です。「今日は法要だからあなたはあっちね」とするよりも、いつもの場所で一緒に過ごしてもらえたらと思います。

法要だからといって、あまり難しく考えなくても大丈夫です。いつもの家で、いつもの家族と、いつもの犬や猫と一緒に、故人を偲び、手を合わせる。そんな時間であっていいのだと思っています。



都市開教寺院を訪ねて

～学び、つながり、味わう一日～



来年1月26日（月）、東京教区仏教壮年会連盟主催の「都市開教寺院参拝バスツアー」を開催いたします。



都市開教寺院とは、人口が集中する都市部において、新たに仏法を伝え、お寺の活動を広げていく寺院のことです。

都市では地域とのつながりが薄くなったり、お寺とのご縁が少なくなったりする中で、さまざまな工夫をしながら仏さまの教えを伝えています。

今回は築地本願寺に集合し、まず海門寺へ向かいます。海門寺では「都市開教とは」をテーマにお話を聞き、都市の中でお寺がどのような役割を担っているのかを学びます。

その後は昼食をいただき、海老名にあるメグミルク工場を見学します。普段何気なく口にしている牛乳が、どのように作られ、私たちのもとへ届けられているのかを楽しく学ぶ時間です。

そして最後は、海老名にある自然寺へ。ここでは「都市開教の現状」についてお話を伺います。同じ都市の中で、それぞれのお寺がどのような工夫をしながら活動しているのか、実際のお話を聞ける貴重な機会です。

お寺のことを学び、工場を見学し、みんなで食事を楽しむ一日です。普段とは少し違った「お寺めぐり」に、ぜひご参加ください。



詳しい日程・時間等につきましては、
別紙の日程表をご覧ください。



海門寺
自然寺



海門寺新聞

第219号 08年創刊
2026年(令和8年)11月号
大和市柳橋1-20-7
TEL 046-263-8604
住職 橋本覚正

海門寺報恩講のご案内

日 時：2026(令和8)年11月7日(土曜日)13:30～

お勤め：正信偈(行譜)を読誦

法 話：山本 顕生 師(浄土真宗本願寺派布教使、和歌山教区浄永寺衆徒、ビハーラ僧)

お位牌：故人の過去帳、ご位牌のご持参をお勧めします

お迎え：13時【大和駅南口前の横断歩道を渡った場所】

この付近にいます

13時過ぎても迎えが来ない場合、海門寺までご連絡ください。お迎えの際も駅まで送迎いたします。



ビハーラとは

「ビハーラ」とは、病氣や老い、死などに向き合う人に寄り添い、その人らしく生きることを支える仏教の活動です。医療や介護のように、病氣を治したり生活を支えたりするだけではなく、不安や苦しみを抱える方の声に耳を傾け、その思いを受け止めながら、ともに歩むことを大切にしています。

浄土真宗では、誰もが阿弥陀さまの慈悲に包まれて生きているといただきます。だからこそ、苦しみや悲しみを抱える人を「支える側」「支えられる側」と分けるのではなく、ともに悩み、ともに生きる姿勢を大切にします。ビハーラは、苦しみの中にある人との出会いを通して、私自身もまた多くのご縁に支えられて生きていくことに気づかせてくれる活動なのです。

報恩講

—「ありがとう」を生きる—

皆さん、11月6日は何の日かご存じでしょうか。
そうです。住職の誕生日です（笑）。

私事で恐縮ですが、今年でまた一つ歳を重ねることになりました。誕生日を迎えるたびに、「一年が経つのは早いな」と感じるとともに、こうして無事に一年を過ごせたこと自体、多くの方々に支えていただいたおかげだと実感します。

そして11月といえば、浄土真宗では大切な法要である「報恩講」の季節です。報恩講は、宗祖親鸞聖人のご命日（旧暦11月28日、新暦1月16日）をご縁として、聖人のご遺徳を偲び、阿弥陀仏の教えを聞かせていただく法要です。

「報恩」という言葉には、「受けたご恩に報いる」という意味があります。それでは、親鸞聖人へのご恩に報いるとは、何をすることなのでしょう。

親鸞聖人が私たちに伝えてくださったのは、阿弥陀仏の本願です。自分の力だけでは迷いから離れることのできない私たちを、決して見捨てることなく救おうとはたらき続ける阿弥陀仏のお心。その教えを、親鸞聖人は生涯をかけて聞き、私たちに伝えてくださいました。

だからこそ、報恩講は「親鸞聖人に何かをして差し上げる日」ではありません。私たちが仏法を聞き、念仏申す身となることこそが、親鸞聖人へのご恩に報いることなのだと思います。

「ありがとう」と言えるご縁に気づくこと。
それが、報恩の一つのかたちです。

誕生日を迎えると、「ここまで生きてこられた」と思います。しかしよく考えてみれば、私一人の力でここまで来たわけではありません。家族や友人、門信徒の皆さま、そして阿弥陀仏のはたらき。その一つひとつのご縁に支えられて、今日の私がいます。

そう考えると、誕生日も報恩講も、どこか似ているのかもしれない。「ありがとう」と言えるご縁に気づく日。

今年の報恩講も、親鸞聖人を偲びながら、これまでいただいていたご縁を味わい、阿弥陀仏の教えを聞かせていただく一日にしたいと思います。

